

パネルディスカッション

【パネリスト】

北野 博司(東北芸術工科大学准教授)

白峰 旬(別府大学教授)

市川 浩文(佐賀県教育庁社会教育・文化財課主査)

北垣聡一郎(石川県金沢城調査研究所長)

【司会】

木越 隆三(石川県金沢城調査研究所副所長)

【木越】 では最後のパネルディスカッションに移りたいと思います。その前に私どもが行っています、石垣構築技術等比較研究事業について簡単に申し上げます。この事業は、3年前に私どもの機関が研究所という形になりまして、新たに少し発展的な研究課題にも取り組もうということで、全国で活躍している若手で新進気鋭の方々6人を迎えて、一緒に共同研究をやろうということで進めてまいりました。

文献を専門とする方もいますし、考古学の人もいます。あるいは城郭史、土木史が得意だという方もいまして、コラボレーション、つまり学際的な研究でやっていこうということで進めています。

再来年ぐらいにはまとめをしなければいけないのですが、今のところ、文献班4人、遺構班7人という構成で、全国の城を対象に石垣技術について調査しています。本日3人のメンバーが話したわけですが、中間報告として成果を紹介したものでございます。

さて、今日の3人の講演や報告の中で、議論したいことを確認しておきます。私どもがこれまで金沢城の石垣編年をはじめ、金沢城の石垣の調査研究を8年近くやってきた中で確認できたことは、大坂城、江戸城や熊本城のような立派な石垣とは違って、金沢城にしかない石垣というのは、玉泉院丸庭園の周辺で集中して見られるということです。特徴のある「切石積み石垣」がありますが、とくに「色紙短冊積み石垣」については、皆さんもご存知だと思います。全国的に見ても金沢城にしかない、金沢城ならではの石垣ではないかと思ひます。この石垣について、北野さんの講演の中で、前提には大坂城などの公儀普請の経験があるのではないかと、画期的な提案がなされました。

そういったところを、このあと議論したいと思ひますし、では、その前田家の技術に影響を与えた天下普請や公儀普請とはいったい何なのかということ、これは白峰さんが近世城郭史研究の一人者としての蘊蓄を持って紹介していただきましたが、そういったことについても若干触れたいと思ひます。

市川さんから、金沢城と同じように全国で石垣編年がなされているなか、その一つの例として黒田長政、黒田家の石垣技術の変遷をご紹介いただきました。黒田家の石垣の造り方の変遷と前田家の変化とを比べることによって、共通点や違いが分かってきます。そこから前田家の石垣技術の価値が新たに見えてくるのではないかと思ひますので、そういったことについても少し意見を聞いていきたいと思ひております。



議論に入る前に、熱心な皆さんからたくさんの質問をいただいております。その中から幾つか取りあげたいと思います。最初に、「公儀普請に東国の大名は関わっていなかったのか、東日本の大名は、自分の居城の石垣は造らなかったのだろうか」という質問と、「外様大名と譜代大名で、公儀普請の関わり方に違いがあったのかどうか」という質問があります。この点について、外様大名といえは西国に多いわけですし、譜代大名は東日本に多いので、東国・西国の大名で公儀普請への関わり方について、どういう違いがあったのか、そして東国大名の石垣造りの力量みたいなものについて、白峰先生から説明をお願いします。

【白峰】 東国大名と西国大名、あるいは外様大名と譜代大名の石垣技術の格差という点ですが、これは先ほども若干申しましたが、例えば江戸城の普請に関して申しますと、幕府としては東国大名、東日本の大名には堀普請、いわゆる土を扱い石材は使わない普請を担当させて、西日本の大名には、石材を使う石垣普請を担当させるという違いを示しています。

これは単に偶然ではなく、東国大名というのは居城を見ましても石垣を使った居城は少なく、使っていても一部分にしか使っていないということがありまして、そもそも石垣構築技術という点においては、かなり西国大名、外様大名とは格差があったのではないかとこのことが言えると思います。東国大名は自分の居城に石垣を使っているかという使っていないケースが多いものですから、技術的に未熟だったのではないかと、その点、細川家とか黒田家とか石垣を使うことに慣れている大名は、公儀普請でも高石垣とか、技術的に難しいところを担当しているということもあって、そういう意味では違いがあると思います。

それから譜代大名と外様大名との違いを言いますと、譜代大名というのはそもそも大名としての成り立ちがかなり遅いですね。外様大名というのは豊臣政権期の頃から大名だったわけですが、譜代大名というのは豊臣政権期では家康の家臣として、それが関ヶ原の戦いの後大名として独立してゆくわけで、大名として歴史が浅いということ、また、普請にもあまり慣れていないという違いがあります。

江戸城普請などでも、かなり後の年代になって、譜代大名が石垣普請に参加するということはあります。その場合でも、例えば細川家史料などを見ますと、普請の道具を細川家から借りたいと、借り受けているのですね。それはどういうことを示しているかというと、普請に慣れていないということを示しているのではないかと、普請の道具を持っていないから細川家から普請の道具を借りていくということですが、その意味で石垣普請にはあまり慣れていなかった面が譜代大名にあるのではないかと感じています。

【木越】 有り難うございました。白峰さんにもう一つ質問があるのですが、「大坂城の公儀普請に前田家が参加していますが、その際戸室石を使っているのか、使っているとしたら海運によるものかどうか、あるいは白峰さんの話の中で、玉造とか鳴野に広大な石置場を作ったということでしたが、そのときの北国石というものを、前田家はどこから切り出したのですか」という質問です。

【白峰】 先ほどご紹介した「安井系譜」というのは編纂史料として、それほど詳しく載っているわけではなく、単に北国石ということが出ているだけです。ですから、その北国石とは北陸



から運んだ石なのか、あるいは北国大名が使った石という抽象的な言い方をしているのか、その辺は分かりませんが、北野先生のご教示によりますと、青屋口の石垣の石は花崗岩である、材質的に見ても加賀藩が地元から運んだ石ではないのではないかという指摘もいただいております。

【木越】 戸室石は大坂城では使っていないということですので、使われている花崗岩は、たぶん近畿地方で採った石だと理解していいと思います。

それから北野さんに伺いたいのですが、質問で「割普請ということで天下普請の際、A、B、Cという大名がいた場合、境目のところは隣の藩とどのように調整したのでしょうか」。それから「作業していく工程はどういうふうの下から積み上げていくのか、縦にどう割っていくのか、その辺の工夫がどのようなものであったか」について教えて欲しいということです。

【北野】 写真で示しましたように、10m幅単位ぐらいで石の色が違ったり、境目が明瞭に見えるわけですが、具体的な施工方法が文献の記録で現れた例はほとんど無いだろうと思います。境目をよく見ますと、布積みの段が若干ずれています。基本的には一段ずつ各藩が横並びで積んでいくのですが、その藩がそれぞれ積んだ境目には石の大きさの違いなどで微妙な差が出てきて、それが一本の縦の線として見えてくるということです。もちろん縦に積んでいくのではなくて、一段ずつ各藩が協力しながら横へ積んでいくということです。



ただ、大坂城で面白いのは、一つの石垣面でも勾配が違うことによって、ねじれが生じている事例があります。一つの組の中で本来なら調整して、一つの面が同じ勾配になるように積むべきなのですが、初期の頃にはそういうこともあったということです。実際にそういうねじれを出さない方法には、現代の施工法でもやりますが、縄を張ってずれが出ないようにしてやっていたのではないかと思います。

【木越】 北垣所長にお答えいただきたいのですが、これも石垣の造り方に関するのですが、「堀の水を張ったまま石積みをしたのか、水を抜いてから行ったのか」、それから「水抜き技術について、穴生（太）衆はそういう技術を持っていたのか」という質問です。

【北垣】 1点目の水の中で工事が出来たのかどうか。これは江戸の中期以降になりまして、新田開発が各地でなされます。海に面したところでは、水の中に実際入ってやっている例もあります。城郭の場合はなかなかそう簡単にいくものではなくて、しかし、その場合でも水の中に入ってやったという記録もありますし、水抜きをしっかりとってから基礎から立ち上げていくということもあったようです。それぞれの場所や条件によって対応の仕方が違っていったようでございます。

もう1点ですが、水を抜く方法は、実は堰を作りました。堰を作って、「竜骨車」という機械で水を揚げていくという工法を採っております。

【木越】 会場からの質問はこれくらいにしまして、次は白峰さんがお話になった公儀普請、天下普請とはそもそも何かという話です。これを本格的に論じると大変なのですが、今日の先生方の天下普請に対する説明の中にも、微妙に食い違うところがありました。白峰さんのお話では、江戸幕府の公儀普請を中心にお話されたように思いますし、市川さんの場合、秀吉がやった1590年代の肥前名護屋城の普請を天下普請と言っていいとおっしゃっていましたし、信長の造

った安土城、あれも天下普請によるものではないかという人もいます。公儀普請と言いましても、研究者によってかなりイメージが多様な面もありますが、その辺を少し白峰さんに補足をお願いします。

【白峰】 「天下普請」と言いますと、天下人が普請を諸大名に課して行うということだと思いますが、そういう意味では信長であれ秀吉であれ、それに該当するかもしれません。先ほどから他の先生のお話にもありますように、公儀普請のシステムとして各大名の石高や知行高に賦課して負担させるというシステムが確立したのは、江戸幕府の行った公儀普請、天下普請からではないかと思います。ですからシステムの確立したのは、やはり江戸幕府の公儀普請ではないかと思います。



【木越】 教科書では、幕府による大名統制という中で、大名の経済力を弱くするために江戸幕府は公儀普請に大名を動員したと書いてありますが、そういう公儀普請に大名を動員する政治的な効果というのを幕府、徳川家は考えていたと思います。

客員研究員でもあります長屋さんという方が会場に来ていますが、長屋さんは、今、テレビで放映されています大河ドラマの山内家の研究をやっているらしいので、山内家の例を出しながら、公儀普請にみられる政治的な役割みたいなものをご説明していただけたらと思います。

【長屋】 長屋と申します。大河ドラマで放映されている山内家ですが、土佐藩の場合、公儀普請を課せられていまして、その結果、藩の財政はかなり厳しくなっています。

これは幕府自体が経済的に土佐藩をいじめてやろうと考えていたかということ、そうではありません。大坂城の天下普請は元和6年に始まるわけですが、その結果元和7年、8年ぐらいに借金で銀3,000貫目あって、経済的に破綻してしまいました。そこでどうしたかということ、幕府に泣きつきます。そしたら幕府のほうで再建策を作ってくれまして、「これから普請役はしなくていい、その代わり土佐にはたくさん材木があるから、その材木を普請役の代わりに出さない。さらに材木を大坂で売って藩財政を立て直しなさい」という指導をしています。そこから考えると、一般的に言われているような、大名をこらしめるという状況は、たぶん無いと考えられます。

ただ、財政を悪化させた結果、土佐藩はいろいろと問題が起きまして、幕府の材木役を課せられるようになった関係で、足輕を材木を切るのに投入し、鉄砲が撃てない鉄砲足輕が生まれてしまうとか、本来だったら石高に見合っただけの家臣団を作らなければならなかったのですが、財政が破綻したために家臣団が弱体化し、結局、郷士というものを、坂本竜馬などにつながっていく郷士というものを、30石程度の土地を開発させて、それを騎馬、いわゆる普通の士分として待遇するという事で補っていきます。

この郷士を増やしすぎたため、800人程度作ったというのですが、幕府から軍事力の持ちすぎだと睨まれまして、後にこの郷士身分を一つ下の「下士」というものに格下げしてしまいます。その結果、今、大河ドラマで放映されているような、上士と下士の確執が生まれたということになります。そういう意味では、天下普請というのは、かなり後々の土佐藩に大きな影響

力、悪い意味で影響力を与えているということになります。

【木越】 有り難うございました。前田家も天下普請に動員されまして、苦労したのですが、土佐藩ほど経済的なダメージは受けなかったように私は感じていますが、大名ごとに与える影響も違うと思います。

今日の北野さん、市川さんのお話を通して、大坂城などでは、大名がいろいろなタイプの石垣を競演するように造っていったわけですが、そこから様々な技術的影響を受けたという話がありました。そういう天下普請で受けた影響というのは石垣のどういうところを見たら分かるのか、北垣所長からあらためてまとめていただけたらと思います。

【北垣】 私は今日のお話の中で、石垣から見ますと3点あったと思います。それは石垣の天端の部分、市川さんの資料で言いますと12頁です。12頁の番号で申しますと4番です。3期の福岡城Ⅰ期というところ、それから8番、6期の大坂城Ⅰ期のところ。これをよくよくご覧になりますと、この反りの一番てっぺんの部分が僅かに上を向いています。その僅かに上を向いている部分を石垣を築くとき水平にしますと、どうしても垂れて見えるため、両方をちょっと上げるわけです。これを石垣の「撫^{なで}の気負い」と言います。そういうものが実は天下人の城に設けられるものだというのが、技術書の中に書かれています。それは天下人だけでなく、かなりあちこちにあることも事実です。これが1点目です。



2点目。これは石垣の反りが、いつ登場するかという問題です。今の資料でいうと、同じく8番の写真。大坂城の石垣は、市川さんが反りを調べられたときに、法勾配^{のり}から僅かに反りあがってくる部分の反り、これが天正から文禄時代までは原則としてないものだと思います。ならば、いつ出てくるのかというと、慶長期に出てくるものです。ですから、今日の話は非常に大事なところをお話なさっているわけです。慶長期から勾配に反りを付けたものが出てくるといことです。

一方、小倉城の話をしたときに、法勾配は真っ直ぐだと言われましたね。ですから、天正時代から続いてきた法勾配と慶長期から出てきたノリ返しの勾配、そこに違いがあると思います。それが反りです。

もう1点、石材の問題ですが、これも13頁で市川さんがお話したように、角石と角脇石と、それから一般の石垣を造る築石、この三つの形の石材が2期の図に描かれています。これが3期、4期、5期、そして6期になると、図のように変わってくるわけです。つまり変化内容で申しますと、切石の規格化、そして大型化ということが重要です。これらについて今の質問にありましたように、天下普請のお城の中で考えていかなければならない3点目ではないかと思います。

【木越】 有り難うございました。今日は九州大名の石垣技術が天下普請の場で、どのように変化したのかということを紹介いただきましたが、同じ客員研究員の楠さんが松山城など四国の大名の石垣技術について、同じように天下普請の場でどういう影響を受けたかということ調査しています。簡単でいいのですが、四国の大名について少し紹介願えませんか。

【楠】 只今紹介にあずかりました松山市教育委員会の楠と申します。四国の状況ですが、四国

とはいいまして、実際に近世城郭を築いたのは豊臣秀吉が四国を平定してからということで、九州とよく似た状態です。3期ぐらい画期がある中で、1期は豊臣秀吉の平定によった直後、2期目の画期が、まさに慶長期、関ヶ原の合戦の後の時期になります。その頃築城されたお城の数は多いのですが、その中で九州とよく似た状態で見られます。とくに松山城などはその典型ですが、築城した期間の中で、元々野面積みだったものが打ち込みハギに変わり、最終的には切石に近づくような状態になっていきます。このよう意味で、江戸城からはじまって大坂城であったり、名古屋城も含めてですが、天下普請の石垣の変遷とよく似た変遷を示しています。それは花崗岩という同じ石材だからということもあると思いますが、城郭石垣がたどるべき流れだと思います。

ただ四国については、高松城、宇和島城、徳島城など个性的なお城がありまして、石材がとても多種多様でございます。その関係で天下普請で見られるような安山岩とか花崗岩で造られた石垣とはちょっと違い、在地の特徴をよく残し、野面積み石垣が最後まで残ったりすることもございますが、影響は同じようにあると理解しております。

〔木越〕 有り難うございました。九州、四国の大名は先進的な石垣を造ったところの大名で、慶長期以後も、つまり関ヶ原の合戦の後の公儀普請でも影響を多く受けたということです。

では、加賀藩前田家はどうだったのかということになるのですが、そこで前田家のほうについて話を移していきたいと思います。前田家の技術的な特徴について、今回、前田家について説明が少ないという苦情も質問の中にありましたが、滝川さんから少し前田家が天下普請を通してどういう影響を受けたのか、ということの補足説明をしていただけませんか。



〔滝川〕 金沢城調査研究所の滝川です。北野先生のご講演の中でも少し触れられたことなので、おさらいになると思いますが、お答えしたいと思います。

パンフレットの1頁目に掲載されているのは、大坂城天下普請の石垣の状況でして、一番右側の列が前田家の担当部分の石垣（写真）で、上の段から下に向かって1期、2期、3期と変遷しています。大坂城において、前田家が担当した第1期の石垣と第2期の石垣との違いとして現れる要素は、築石部分の規格化と積みにおける布積みの傾向です。また、築石同士の隙間は第1期の段階ではかなり目立ちますが、第2期以降については、築石の規格化と間詰め石をうまく使うことで目立たなくなり、その結果、面全体が滑らかな状態になっていきます。こういった点が天下普請で学んだところだと思います。

先ほど北垣所長が言われた反りの問題は、たいへん重要と思われますが、元和期以前に大きな変化があるようで、大坂城の石垣で見る限り、目立つのは元和期から寛永期にかけての変化、つまり築石の規格化、布積みの進化、石垣面の平滑化、そのあたりがよく見出せると思います。

それから、更に重要なことで、討論の最後に出てくると思うのですが、大坂城の第2期の段階で「切石積み」を手がけていると北野先生が言われた通り、おそらくこの時期、金沢城ではまだ「切石積み」ができていなかった可能性がありますので、本城に先駆けて「切石積み」を手がけていることになります。以後の金沢城の石垣の展開のあり方を考えると、ここも非常に

重要になってくるかと思います。

申し述べたことは現象面でして、当然のことながらこのような石垣を可能にする技術、あるいは体制、そして、こういう石垣をよしとする意識、そういうものも含めて考えていく必要があるのではないかと考えています。

【木越】 金沢城の石垣において、石垣の大きさが規格化されていき、横目地が通った布積みになっていくという変化が認められていますが、天下普請を経験する中でその傾向が急速に進んでいったという指摘、更に金沢城の石垣の特徴は切石積みにあるのですが、その切石化ということも大坂城の第2期の段階で出てくるということですので、その辺の話に進めていきたいと思っています。

私どもがいつも紹介している玉泉院丸まわりの「色紙短冊積み石垣」に代表される、金沢城でしか見られない石垣について、北野さんから一つの提言がありましたが、玉泉院丸の石垣調査を研究所でやっていらっしゃる富田さんから一言、北野さんの提案についてコメントをいただければと思います。

【富田】 金沢城調査研究所の富田でございます。玉泉院丸というお庭にある「色紙短冊積み石垣」という、この特徴的な石垣は、金沢城を代表するような石垣作品ですが、この石垣を位置づけていくときには幾つかのキーワードがあると思います。

今回のシンポジウムでも先生方のお話に出ていましたが、一つは穴生の性格です。白峰先生から、公儀普請に備えるため穴生を技術官僚として召抱えていたという話がありましたが、実は玉泉院丸の石垣が今のような切石になった頃というのは、公儀普請の後からです。そういう意味で江戸城の天守台を経験して、そこでのいろいろな知識を十分活用できる条件がありましたし、あるいは、諸藩では公儀普請が終わると穴生をリストラしたという話がありましたが、加賀藩はリストラしなかったのです。つまり穴生のような技術者たちを公儀普請が終わった後も手厚く用い続けた、そういうことがおそらく背景にあるような気がします。

そして玉泉院丸を考えると、あの石垣は庭の石垣だということが大きな要件になると思います。見て楽しむと言いますか、鑑賞するのがお庭ですので、そこにある石垣も斜面を支えるだけのものではないですね。土台であるとか、擁壁であるとか、そういう土木構造物として支えるという機能だけじゃなくて、お庭の中にある以上、見る石垣、見られる石垣ということになります。

石垣を鑑賞の対象にするという、そういう発想のもとで、石垣を庭の構成要素の一つにする。「色紙短冊積み石垣」は、他に例が無い独創的な石垣であったというところに、大きな特徴があるのかと思います。

【木越】 これについて、北野さんから補足していただければと思うのですが。

【北野】 今の富田さんの話に尽きると思いますが、やはり天下普請の体制の中からは、直接は生まれてこないということですね。加賀藩の当時の五代藩主がいろんな文化政策を重点的に行っていた中で、お茶とか庭の文化を大切にするという風土があってこそはじめて出現し、そういう技術者だけではなくて、文化力というものを藩の一つの売りとして、政治的にもそういう政策を進めたというところが大事ではなかったのかと思います。

【木越】 有り難うございました。ちょっと話を変えますが、市川さんの話の中で、最後に黒田家の殿様自身が、石のサイズをあれこれ指示していたという話がありました。ちょうど「色紙短冊積み石垣」のときの殿様は五代綱紀になると思いますが、石垣造りに殿様自身が口を出す

という黒田家の例を示してもらったのですが、前田家の場合、どうなのだろうかと思ひますので、そのところを、文献のほうから比較研究事業に参加している研究所の石野さんから、五代綱紀の立場から「色紙短冊積み石垣」がどう見えてくるのか補足いただければと思ひます。

【石野】 金沢城調査研究所の石野と申します。まずは五代藩主綱紀に関して簡単に説明したいと思ひますが、（業績を）短時間では言い切れません。なにしろ3歳で藩主になりまして、79年間も藩主を務めた人物です。政治的には、（世襲の執政家である）八家の制度を定め、藩のシステムといひますか、藩制の整備を行い、精力的な藩政の牽引役として、つとめてきました。また、文化的な政策としましては、全国的な図書の収集は著名ですが、木下順庵、稲若水ら名だたる学者はじめ、五十嵐道甫、後藤程乗ら職人たちや千宗室などといった茶人をも招き文化振興につとめました。さらに彼自身も、学者としても知られ、「桑華字苑」といった著作、「丙寅旅中雜記」などの旅日記なども残されています。これらのものを見ますと、この植物の名前は何かと家臣などに尋ねたりするなど、知的好奇心が旺盛で、こだわりがあるようにも感じます。

「色紙短冊積み石垣」に関しまして、綱紀が（築造を）指示したという史料は、捜してはありますが、残念ながら（現在のところ）見あたりません。1686年、二ノ丸御殿を増築したときに奥能舞台を造っておりますが、一度は完成したものをやり直しをさせており、やはり（ここでも）本人なりのこだわりなり、美的センスなりがあったであろうことは十分考えられます。おそらく「色紙短冊積み石垣」につきましても、綱紀の意志や好みがあらわれたのではないかと私は推測しております。

【木越】 確実な史料はまだ無いようですが、綱紀が指示を出した可能性は十分あるという話でした。

最後に市川さんにお聞きします。今は前田家について語っていますが、市川さんが調査された黒田家の石垣技術の影響、それを前田家の場合と比べてみて、どういうふうに感じられたかお聞かせください。

【市川】 黒田家の場合は、早い段階から天下普請のような大きい城郭普請に携わる機会を得てきた面があるかと思ひますが、ちょっとその答えにはならないかもしれませんが、先ほどから前田家の「色紙短冊積み石垣」について、天下普請との兼ね合いで、その後に発生したというお話がありました。私はそれだけではないのではないかとと思ひます。例えば、金沢城の石垣というのは、元和期ぐらいから石垣の表面をかなり調整してきています。石垣表面の調整というのは、九州の石垣ではほとんど見られないですね。



何故かなと思ひうのですが、おそらく石材の違いに由来するのかなと思ひます。例えば、熊本城などの石垣は安山岩ですので割ると綺麗に割れます。ということは、後で表面を調整する必要はほとんど無いわけですね。逆に戸室石というのは何ったところ、ざっくりと割れて表面が荒れ、そのために表面を調整していくという手法をとっていったのかと思ひます。

石を美しく仕上げるこだわりというのは、当然、「色紙短冊積み石垣」を積み始めた頃初めて出てきたのではなくて、そういった戸室石の特徴があればこそ、そういう石と取り組んできた

経験の中で生まれており、そこに反映されていたのではないかと思います。直接的な答えではないですが、そう感じました。

【木越】 興味深いアドバイスをいただきまして有り難うございました。

そろそろ時間ですので、北垣所長から今日の講演・報告あるいはパネルディスカッションのまとめをお願いしたいと思います。

【北垣】 それぞれ金沢城にとりまして、今日は大変いいお話をいただきました。その中で、白峰さんがいわゆる北国衆の技量について、いろいろな史料で説明していただいたわけですが、どうもそれじゃ加賀藩の石垣技術はいったいどうなのか、という心配は残りますよね。私はそれについて、最後に申し上げたいと思います。

例えば、配布されたパンフレットの6頁の写真1と2というのは江戸城本丸の石垣でございます。これは加賀藩が実際に万治元年に造ったものでありまして、この写真1、2の部分と、表紙全ての写真が江戸城天守台石垣の事例であります。

現存します江戸城の天守台は、今申しましたように、加賀藩が単独で、おそらく今日のお話のことで言いますと、最後の公儀普請で造った石垣であります。膨大な資金、資材、そして労働力、多勢の人足を使っているということが分かるわけですが、それには公儀穴太も参画しております。石材はいずれも当時のブランドとして有名な、瀬戸内海の犬島産の御影石を使っています。御影石は、この段階でブランド名になっているわけです。それを使っております。

石は全て公儀が加賀藩に対して与えたものです。石材はご覧のように、いずれも規格化された大型の切石です。極めて精緻な切石です。築石にも大中小とありまして、一番下は大きい石、中段は中くらいの石、一番上は小さい石というように、3通りの石材で積み上げているわけです。

しかも先ほど触れましたように、天下人のお城に用いられたという「気負い」も実は入っています。反りもこの石垣にはあります。いわば今日のお話のトータルで出てきた公儀普請の全てが、最後の江戸城の公儀普請で使われているということです。

私が見る限り、江戸城天守台石垣は我が国のこういった公儀普請の中の最高傑作と見ていいと思います。それが先ほどから出ていますように、金沢城の玉泉院丸で使われている「色紙短冊積み石垣」の生まれる素地が江戸城天守台石垣にあったのではないかと思います。

その他いろいろとご意見が出ましたように、これからの大きな検討課題が多々であると感じております。

【木越】 有り難うございました。

今日は、大坂城で前田家の石垣技術は下手だとか、失敗したとか、かなり手厳しい言い方がいろいろ出てきましたが、その前田家がそれから30年後の万治元年の江戸城普請では、一番目立つ天守台で、一番立派な石垣を造ったということを評価していただきました。それがその後の寛文年間の「色紙短冊積み石垣」などにも、何らかの影響を与えていくのではないかとという指摘でした。その辺の経過についてはもっともっと緻密な検討が要るわけですが、そういう大きな流れを今日は明確にできたのではないかと思います。

そんなことが石垣造りに関わった加賀藩の穴生たちにとっても大きな自信や誇りになって、前田家は穴生たちをリストラすることなく、幕末までちゃんと数人抱えていきました。

こういった「色紙短冊積み石垣」の源流や背景などが、今回の議論で明らかになったのではないかと思います。ただ、我々の課題は今日の議論を通しまして、ますます多岐に渡り、問題

点も多くなったように思います。こういった問題を更に精査して、より確実な研究成果へと今後まとめていきたいと思っております。

本日はほんとうに足元の悪い中、多数の方々に参加いただきまして、しかも最後までご清聴いただきまして、大変感謝申し上げます。有り難うございました。

